
漆黒の刃　～ 最速の剣士 ～

桜楼月華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の刃 ～最速の剣士～

【Nコード】

N9566U

【作者名】

桜楼月華

【あらすじ】

これは、『漆黒の刃』の未来です。

え？ 漆黒の刃も終わってない、どこどこか書き始めたばかりなのにそんなの書いていいのかって？

いいんです。だって俺の小説ですから。同時連載していきます。守護者となったカオルが出くわしたイタリアでの事件。

使徒の計画により終わりを迎えたと言っても過言ではないイタリアの町。そこでカオルは、どの様に生き抜き、計画を止めるのか。

キャラ説明とか

【キャラ】

城崎カオル

高校時代、守護者（守護神）のナギと出会うことで世界の裏事情と関わることとなる。

親を亡くしており、その時に攻撃の象徴である黒剣を体の中に作り出してしまう。

その黒剣が、ナギとの関係を深めたと言っても過言ではないだろう。

身長は百六十センチと、高校男児にしては低め。声は低くもなく高くもない。

ナギと別れてからは世界を転々と巡り、使徒の討伐を順調にこなしていった。

そんな旅の途中。

カオルはイタリアのとある町で、とある使徒の計画の一端を見る。彼の剣は『黒剣・黒椿』と言う。

彼のスタイルは速度を活かした連撃。相手に攻撃をさせる隙を与えぬまま、攻撃をドンドン加速させていく。

技という技は二つしか持ち合わせていない。

・技的なもの 【一撃 瞬花】

相手の懐に潜り込み、決定的な一撃を一瞬で切りつける。

その一撃を一瞬で切りつけるを連続で使用した【連撃 瞬花】もある。

相手の懐に潜り込み切り裂く行為を一瞬で五回繰り返す（筋肉や肉体的に五回が限界）。

斬った瞬間は相手は無傷の様に見えるが、一秒遅れで血が噴出する。

その様が花のようであることから【瞬花】。

ある意味、【連撃】の方が名前の元だ。

【連撃】は簡単に言えば、【一撃】のパワーアップ版というものだ。

【剣技 五月雨】

相手の胴体を一瞬で5度斬りつける。早すぎる故に、一撃で五つの傷ができたと言わざるを得ない。

これにもパワーアップ版である【真技 五月雨】と【神技 五月雨】がある。

【真技】は十回斬りつける。つまり、【剣技】の倍。

十回も斬りつけるには、狙いが定まらず出鱈目に繰り返す他ない。

【神技】は黒椿の補助を受け、二十回の連撃だ。

それで尚、一撃に見えろという反則染みた技でもある。

黒椿による補助は肉体補助と思考補助だ。思考補助を受けてる最中は一秒が何十秒も伸びるし、肉体補助のおかげで、人体の限界を超えた動きさえも可能にさせる。

正しく反則である。

その代わり、一種のドーピングであることに変わりはない。後の副作用は半端ない。

・武器 【黒椿】

カオルが持つ唯一の剣。彼の憎しみが具現化したと言っても良い。それは宝具並のモノであるからして、使徒に目を付けられやすい

らしい。

その概念は【闇】と【攻撃】。そんな概念を持つ宝具を自らの体内に生み出すのは、人間としては珍しい。

闇という性質上、敵を殺すことのみに特化している。

黒椿自身に意思がある（ということにしようかどうか悩んでる）。

【影槍】

【影】の概念を持つ黒い槍。

カオルが最初に見た男が持っていた槍。

影を操り、拘束することに長けている。

炎などのエネルギー系は影をすり抜け、物理攻撃でもそう簡単に斬れることはない。

だが影槍というのは偽名であり、真名は「グングニール投げ穿つ黒き槍」。

更に改良されもうひとつの真名「ゲイ・ボルグ心穿つ呪いの槍」がある。

真名の解放は影という一種のエネルギー系から完全物理攻撃になる。

グングニール

「ゲイ・ボルグ投げ穿つ黒き槍」と「心穿つ呪いの槍」の併用により、底知れ

ぬ貫通力を持つことになるため、防ぐにはかなり高密度のシールドが必要になる。

【キャラ】

ナギ

カオルと高校時代に出会った一人の少女。

少女と言っても、力はカオル以上。容姿は幼い女の子。小さなツインテールに腰まで届くロングヘアーが特徴的。

アエスニクスという炎のデーモンと呼ばれたモノと契約して守護

神になった。

彼女が持つ武器、長刀・朱凧は炎の概念を持つ。それに炎のデーモンであるアエスニクスの付加効力で炎の質は一級品。

ちなみに彼女は一応、既に二十歳超えだ。

技は持ち合わせていない。

使徒を狩り続けた経験上、どの様に剣を振るえばいいのかを把握しているため、固有の技がないのだ。

・武器 【朱凧】

彼女の持つ宝具。紅蓮に燃える炎を生みだす力がある。

概念は【炎】。

身長の高い彼女には扱い辛い様に見えるが、そうでもないようだ。

【キャラ】

アニーゼ

ただの普通の少女。イタリア人。

十三歳にしては立派に育った普通の子。

容姿は、将来絶対に美人になる金髪さん、としか言えない。

というか、外見は結構悩んでる。イタリアの人って地毛で金髪の人いるのかなー、と思ってたり。

更新：外見決めました！ 金髪のツインテール！ これでいいでしょ！ イタリアにいるか知らないけど！w

キャラ説明とか（後書き）

キャラの他に、分からない言葉とかも説明していきたいと思います。
分からない言葉があったら言うてください。

一人の少女との出会い（前書き）

キーワードってどういつのを書けばいいんだろう。
だれか教えて。

一人の少女との出会い

一体、どれだけ歩いただろうか。

一人で孤独な旅路。

とても険しいと言えは険しい人生だった。

とても優しいと言えは優しい人生だった。

世界は天才に厳しく、凡才に優しい。

俺はどちらでもなかった。

剣の才能は人並よりはあるが、ナギには到底及ばない。

故に、経験してきた。

できるだけの剣と自らの剣を交え、ただ冷酷になって剣を振るった。

人を助け使徒を殺す存在となつてから数ヶ月で高校を卒業し、それから数年ナギと共に旅を続けた。ナギと別れたのは、ナギの持つ指輪と同種のネックレスを手に入れてからだ。

そのネックレスもアニスと通信が繋げることができた。

故に、別れてからも数日に一回というペースでナギと会話している。

今、俺の首には二つのネックレスがぶら下がっている。

一つは、先程言つた通信用。

もう一つは、世界に出ても言語が分からないんじゃない意味がない、とナギにプレゼントされた物だ。

これがある限りは、外国の言葉が分からないということは絶対にない。

相手がアメリカ人だったとして、喋る言語は英語だ。相手の英語は、俺に日本語となつて聞こえる様になっており、俺の日本語はそのアメリカ人に英語となつて聞こえる。

便利極まりない道具だ。

その道具には随分と助けられたものだ。

適当な船とか飛行機とかに乗る為の金を得るため働いたりしてたし。

ちなみに、浮遊術は未だ特訓中。十センチくらい浮かぶようになったが、精神力……霊力の消費が激しく、実戦では使い物にならない。

精々、高い所から落下した時の衝撃緩和と言ったところだろうか。

そんな俺は、今イタリアにいる。

その光景は昔見た世界の観光地を紹介するテレビ番組で見たイタリアそのものだった。

数十年経っても変わらぬ光景というのは、素晴らしいものだ。

……景色を眺めてる暇は、実は無い。

先程、変な術式が展開された気配がしたのだ。

故に、急いでいる。展開されたと言っても、一人に埋め込まれたというくらいの小さな物だ。

恐らくグールでも作っているのだろう。

それでも、無駄な犠牲が出る前に潰しておくのが良いに越したことはない。

「……強化の術式でも使うか」

アニスに教えてもらった最も基本的な術式。

両足に、六芒星の中に数十個の梵字を書き入れていく。

「完了」

自己暗示的に呟き、地を駆けた。

「これは……………何事だ」

町を見下ろせる丘に立つ。

町から、悲鳴という悲鳴が聞こえる。

——ちっ。

思わず舌打ちをする。

ナギに言われていたことじゃないか。

例えグールであろうとも樂觀視することなく、早急に討伐に向かえと。

「ナギがいなけりやこの様か。ダメな男だよ、まったく」

一種の余裕だったのだろう。

グールなら漏れだしている靈力を辿ればいいのだから、簡単に見つかる。

だが、術式を幾つか発見したが……今やその術式の気配も見つからない。

町に入ろう。そうでもない限り、何が起こってるのか良く分からない。

目に強化の術式を掛けたところで、目が良くなるわけじゃないし（鉄並に硬くなるだろうけど。最早目と言っていいのかすら危い硬さだ）。

足に掛けた強化をそのままに、町まで一気に駆けおりた。

町に入った俺を待っていたのは悲鳴悲鳴悲鳴。

あまりの大音量に耳が痛くなる。というか、耳鳴りがする。

「なにごと……ん？」

悲鳴が近づいてくる。

前方を見ると、大勢の人がこちらへ逃げるように走ってくる。

なるほど……人に認知されても構わない計画を考える使徒でもいるのか。

そうとなると、どんな計画だ？

これまで俺が会ってきた使徒は必ず密かに計画を立てていた。

理由は一つ。

守護者や守護神に見つかからない様にするためだ。

騒ぎが起これば、ニュースとなって全世界に伝わる可能性がある。

それを見た守護者がどう行動するのか。そんなこと、誰でも分かることだ。

なかなか長生きしている守護者は、瞬間移動とか自らを転送させたりする術式を使うからな。そんな術式を使える守護者は大抵強者だ。

そう考えてる間に、その大勢の人達が俺を巻き込みながら走っていく。

これだけの数の人だ。俺を避けて通るなど、できるはずもないのだろう。

しかし、俺はこの先の状況を見なくてはならない。

強化の術式は未だ解いていない。

跳躍をして、近くの建物の屋根に乗る。そして町の中心へ向かうことにした。

進んでいると、何故あれだけの人が逃げてきたのか納得できる光景が広がった。

人が人を食う光景だ。

映画の中の様な光景、と言えば分かりやすいだろう。

ゾンビとなって人を襲い、人を喰らう。そんな中、更に俺を驚かした出来事が起こった。

食われた人間が、動いたのだ。

恐らくゾンビもどきに殺されると、同じくゾンビになるのだろう。……守護者となった俺だが、肉体構造や構成物質は人間そのもの。食われれば、俺もゾンビもどきと化するだろう。

一応黒剣『黒椿』を二刀、俺の中から引っ張り出しておくことにしよう。

剣の才能が曖昧な俺では、この数を相手にするのは一刀では足りないまい。

「さて……まずは生存者の保護を優先しよう」

こんな状況だ。生存者がいなくても不思議ではないが、いても不思議でもない。

どこかに隠れているのなら、尚更だ。

……一度、家の屋上から飛びおり、死を覚悟してゾンビもどきの前に静かに立ってみる。

「……………」

目の前に獲物がいるはずなのに、そのゾンビもどきは俺をスルーした。

——視覚がないのか。熱も感じないのだろう。となると痛覚はあるのだろうか。

ゾンビもどきの肩に手を置いてみる。

「……………」

リアクションは無い。少し強く肩を掴んでみる。

「……………」

リアクションあり。

こちらを振り返り、襲いかかってきた。

ゾンビもどきの同体を両断することで、攻撃を回避する。

攻撃こそが最大の防御。これもナギに教えてもらったことだ。

これで分かったことは一つ。

ゾンビもどきは視覚がなければ熱も感じ取れない。痛覚は鈍い。

となると、何を目標として人間を襲うのか。

考えれるのは、音。考えられるのは音しかない。

臭いも考えたが、だとしたら俺が目の前に立った瞬間襲われている。

そもそもゾンビもどきは早くも肉が腐敗していてとてつもない異臭を放っている。

臭いを元に襲っているのなら、ゾンビ同士で共食いが起こっているだろう。

左手に持つ黒椿を投擲してみる。

ザクッ。という音にゾンビもどきは反応した。

やはり音か。厄介だ。

刺さる音だけで反応するということは、当然足音でも反応するだろう。

そして、気付いた。

音で反応するということは、あれほどの悲鳴を上げていた人間達は、どうなる……？

すぐ戻ろう。

そう思い、駆けだそうとした時だった。

「い、いやああ！ 来ないで！」

声からして少女だろうか。今にも食われそうになっている。

それも、先の大声の所為でゾンビが集まっていく。

「……………ちつ。甘さは捨てたつもりだったが……………助けに行くか」

本来ここでの選択肢は少女を見捨てて、あの大勢の人達を助けに行くことだ。

だが、敵が一人でも増えるのは辛い。うん、辛い。

そう無理矢理な理由をこじ付けて、俺は少女の元へと跳躍した。

S i d e 少女

「い、いやああ！ 来ないで！」

正体不明のゾンビたちに囲まれ、最早助かる術などなかった。

尻もちをついて、立ち上がる気力さえない。
死を覚悟して、硬く目を瞑った。

「あ、ああああ……」

ゾンビの声だろうか。

力なく、生気を感じられない。

その声の後に、ドサツと何かが地面に落ちる音がした。

「……………え？」

目を開けると、大きくて黒い背中があった。

手には二刀の黒い剣。髪は男としてみれば長い。黒い髪は優雅に
靡き、幻想的な光景だと思ってしまう。

こんな状況にも拘わらず、そのサラサラとした髪に触れてみたい
と思った。

しかし気付いた。男の足元に、先程のゾンビが横たわっているの
に。

「怪我はしていないか？」

声がした。

低くなく、高くない。中途半端な声だった。

見ると、男がこちらに顔を向けて微笑んでいた。

「は、はい……」

それに答えるも、堪らずその男の顔に見惚れた。

日本人、だろうか。私の知り合いにいる日本人の肌にそっくりだ。
黄色人種。

父親からはその知り合いと深く関わるなど言っていた。
父親は日本人が嫌いだったのだ。確かに、その知り合いは嫌われ者だったけど……。

そんなことを考えている間に、男は動いていた。
何をしているのだろう。

そんな疑問は、すぐ解された。
斬っている。

ゾンビになったとは言え、人間である彼等を、この男は躊躇いもなく斬っているのだ。

信じられない……いや、信じたくない光景だった。

さつき、あんな優しい微笑みを私に向けてくれたのに、今は殺人鬼と同じ存在になっている。

いや、殺人鬼なんて表現は甘いかもしれない。

だってここまで躊躇なく斬っているのだ。きっと今までもこうして人間を殺していたに違いない。

そう思うと、恐怖に心が支配された。

——逃げ出したい。

けれど逃げ場などない。

ゾンビに囲まれてしまい、逃げるとしたら上しかない。

そんな時、一人のゾンビの手が私の頬をなぞった。

「ヒッ——」

堪らず目を瞑る。

だけど、すぐにそのゾンビの手の感触は消えた。男が蹴飛ばしたのだ。

「汚らしい手で人に触れるな。防腐剤でも飲んでから触れ」

そんなことを言いながら、蹴飛ばしたゾンビに止めとばかりに剣を心臓に突き刺す。

しかし、不思議なことが起きた。

いや、その不思議はずっと前から起きていた。

同体を斬られても、腕を落とされても、足を両断されても、襲ってくる。

心臓に突き刺したであろうゾンビも、すぐに動きを再開させる。

「……キリがないとは、正にこのことだな」

男は訝しむ様な目でゾンビを見ながら呟いた。

「すまないが、失礼するよ」

その言葉と共に、私は宙に浮いた。

そう、浮いた。

つて――、

「ええええええ！」

驚きのあまり、絶叫。

しかし浮いたのではないとすぐに理解した。

お姫様抱っこだ。

しかも、男はそのまま跳躍した。あり得ない高さまで。

女とは言え私も人間。

人一人の体重を持ちながらこんな高度まで跳躍する人間は人間なんて言わない。

——化け物だ。

私はそう思いながら、男の顔を見た。睨みつけるように。
だが男はその視線に気づかず、ただ下を向いていた。

その後は、どこかのお店の屋上だと思われるところに着地した。

S i d e カオル

「あなた、なんなんですか？」

開口一番。そんなことを聞かれた。

まあ、それもそうだろう。その疑問を持たない方がおかしい。

「ただの通りすがりだ」

「嘘ですよね」

……嘘ではないのだから。通りすがりという事実を言っただけなのに。

「半分嘘で半分本当だ」

だから、こう言うておく。

嘘じゃない嘘じゃないと言っても、きっとこの少女は嘘だ嘘だと言っただろう。

無限ループほど怖いモノはない。
ならばこう言った方が納得する。

「そう、ですか……」

ほら、納得した。

しかし、この子に構っている暇もない。

すぐにでもあの大勢の人達のところへいかないと……。

「えと、どこ行くんですか」

……どうすればいいのか。

この場合、この少女を見捨て大勢を助けに行くのが正解。一人を助けて多くを見捨てるのは間違いだ。

だが正解ばかりが正解とは言わない。

人情に侵された人間の行動は殆どが間違いだらけ。

だから人間から見た正解は、間違い。

人間から見た間違いは、きつと正解。

俺が言う正解は、人間から見たモノじゃない。効率的な問題だ。

ならば人間は人間らしく、人間の正解に従おう。

「そうだな。向こうには大きい声を出している人が多数いた。あんな大きな音を立てていたら、一生追いかけて回される羽目になる。それを止めにいく。君はここで静かにしている。あのゾンビもどきは音に反応する。なに、大勢の人を助けた後君を助けにくるから——」

「ああああああああ！」

なんか叫び出した！

「俺の話聞いてたか！？」

「……だって、怖いだもん」

「ならば静かにしている」

「そうじゃなくて……」

なにがなんだか分からないが、何かに怯えている小動物の様に見えてきてしまう……。

なんというか……俺もことん、甘いな。

「静かにしてるっていうなら、ついてきて良いぞ」

「……………ありがとう」

小さい声だったせいも、あまり良く聞こえなかったが礼を言われた様だ。

ため息を吐きながら、後頭部をポリポリを搔く。

「礼を言うのは良い。ああ、いいとも。だけど、この状況はあまりよろしくないんだよな」

「……？」

何を言ってるのこの人、みたいな目で見るな。
これはお前が招いたことなのだから。

「下は見るなよ。下手をすれば嘔吐するぞ」

下から聞こえる声と擬音。

恐らくさっきの「あああああああああ！」発言でゾンビが集ま

つてきている。

擬音の正体は、ゾンビがゾンビを食っているのだろう。本能でしか動いていないのだから、共食いなんてあり得ることだ。それにしてもことんゾンビだ。

さっきの戦闘で分かったが、こいつらは死なない。

胴体を両断しようと、腕の筋肉を断ち切ろうと、足の腱を斬ろうと、追い掛けてくる。

音がする所へ、本能的にやってくる。

これは何が目的なのか、という疑問は後回しだ。

生存者の保護、及び、ゾンビの殲滅（四肢を裂いてから焼却の術式展開すれば、恐らく成功する）。

少し大変だが守護者には打ってつけの注文というやつだろう。

ああ、もうひとつあったな。

「ほら、いくぞ。どうせ来るのだろ？」

「あ、うん……。そういえば、あなたの名前は？」

「人の名前を聞くときは、自分の名前を名乗ってからにしてほしいな。まあいい。俺は城崎カオルだ。君は？」

「アニエーゼです。これからよろしくです、カオルさん」

こんなときにも拘わらず、いい笑顔だと思った。

可愛い中に美しさを孕んだ笑顔。

しかし、見たところかなり幼い。

「君は何歳なんだ？」

「えと……十三です」

「……そうか、強いんだな」

「え……？」

「いや、なに。俺が十三歳のときにあんなモノを見てしまったら、きつと笑顔を作れないだろうと思ってね。それに比べて、君は可愛い笑顔を見せた。だから強い」

「か、可愛いだなんてそんな………」

「否定はするな。俺の目が節穴だと言われるようだ。そこは礼を言えば良いのだよ」

「ありがとうございます……」

それでいい、と満足しながらアニエーゼの小さな頭を撫でる。
アニエーゼは猫の様に目を細めながらそれを受け止めてくれた。

一人の少女との出会い（後書き）

どうだったでしょうか。

カオルの高校時代の『漆黒の刃』は未だ三話止まりです。
できるだけ更新していくので、そちらの方もどうか見てください。

文才がないオレなので、きっと指摘されるべき個所が幾つかあるでしょう。

よければ、いろいろご指摘していただけるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9566u/>

漆黒の刃 ～最速の剣士～

2011年10月8日20時08分発行